

55 ウィルヒョウと精神科医たち

梶田 昭

「偉大なロマン主義者たちの最後の人であるイーデラーは、一八六〇年、ベルリンのシャリテ病院の医長として死

んだ。それはグリーンジンガーが同じシャリテの長として没した年より八年だけ先立っていた」。シルボーグはこう書いている(『医学的心理学史』、神谷美恵子訳による)。イーデラー(一八〇九—一八六〇)がシャリテの医長に就任したのは一八四〇年。伝記は、かれが主として著述の面でその才能を発揮した、と語る。パッションは高利貸しとして働く、という言葉がかれのものとして残っている。かれはランゲルマン(一七六八—一八三二)の弟子、そのランゲルマンは神秘主義者シュタール(一六六〇—一七三四)の系統だった。

ところでウィルヒョウ(一八二一—一九〇二)だが、ベルリンの軍医学校を卒業してシャリテに職を得たのは一八四三年だから、その時はイーデラーが精神科の医長だった。またウィルヒョウは当然、学生のところからこのロマン主義者の医長に教育も受け、接触があったに違いない。ウィルヒョウは「細胞病理学」によって、一般には一九世紀還元主義を代表する人物のように見られている。そのウィルヒョウが書簡の中で、イーデラーに触れているところを見つけた。

一八四五年八月二七日の日付で、シャリテから父親あてに出した手紙である。「シャリテにおける私たちの精神科の医長イーデラーは、つねづね改革者としての私をかわいがってくれています (mich immer aufgezo-gen hatte wegen meiner Neuerungen)。かれは、この道は、もし真摯に追求してゆけば大きな結果を生みだすに違いない、といってくれたのです」。このときウィルヒョウは、かれの線維素説を発表したばかりであった。この仕事は、クリュヴェイエの静脈炎説を批判したもので、かれの研究生生活のいわば処女作ともいえるものだった。

ウィルヒョウはこの次の年、正式にシャリテの剖検医に任命される。そしてさらにその翌年、つまり一八四七年は市民革命の波がベルリンをもおそった年で、ウィルヒョウもその渦中に巻きこまれる。イーデラーがこの社会変革をどういう目で見ていたのか、参考になる資料を私は知らない。

そこで歴史の文脈だが、河合隼雄氏は次のように書いておられる。「イーデラーを最後とする」このロマンチズムの流れは、フロイトの天才のなかに再びよみがえり、それが理性の国フランスの学派との結婚という信じがたい形で現れ出た」(ニング心理学入門二四頁)。イーデラーが最後であった、というのは、イーデラーの後任が、ほかならぬグリーンガー(一八一七—一八六八)だったことに、象徴的に表れている。

グリーンガーといえ、だれでもかれの「精神病は脳病説」を思い出すだろう。そこで軌道は Psychiker から Somatiker へ切りかえられたはずであり、グリーンガーの有名な『精神病の病理と治療』は初版が、さきに引用したウィルヒョウの手紙と同じ一八四五年である。ウィルヒ

ョウの書簡集には、このグリーンガーはまったく登場しない。当時、グリーンガーはヴンダーリッヒ、ローゼルなどとともに、ドイツ医学改革の一方の旗頭であったが、ウィルヒョウはこのグループと親しい関係にはなかったのである。

ウィルヒョウは意外にも(といっても、いま根拠はその書簡に過ぎないが) Somatiker のグリーンガーよりも、Psychiker のイーデラーに親近感を抱いていたのである。

そのことは、ウィルヒョウとグリーンガーの差を考えさせる。同じ局在説といっても、ウィルヒョウは体中にゆきわたって存在する「細胞」に、生理・病理の座を求めた。グリーンガーは、あるかけがいの無い、「脳」という局所に焦点を当てたのである。

現代医学のパラダイムへの批判として、反局在説を主張する人が、ときに標的をウィルヒョウにおくのは、必ずしも適切ではない、と私は考える。

(府中市)